



長野県東御市の 六次産業化を視察して

農業委員 白井英雄

今日の我が国の農業においては、厳しい現状が突きつけられております。T P Pを始めとして、農業従事者の高齢化に伴い、後継者担い手不足により農業離れが一段と進み、その結果耕作放棄地（荒廃農地）が増大し、全国的に見ても農地の耕作活用が進まず、原野化、山林化が進んでおり、全国で9万haを超える面積が有効に利用されず、これらの実態が改めて浮き彫りになってきております。

傾斜地が多く、周りを山林に囲まれた標高500m〜1,200mの地域であります。東御市においても、近年は農地の荒廃、山林化が進んでおりましたが、地元の方々と山林化してしまつた農地の活用を検討し、ワイン用ぶどうの畑に再生することで、荒廃農地の解消、また地域活性化に繋げる方針を固め、平成3年に個人の事業主が荒廃農地を借受け、ぶどうの木を植付を始めました。以降、地域ぐるみで美しい圃場に生まれ変わらせていき、現在の植付面積は30haを超えるまでとなったそうです。更に平成15年に市内にワイナリーが開業、その後もいくつかのワイナリーが増え、平成20年に「とうみSunライズリキュール特区」の認定を受け、小規模ワイナリーを集積することによる特色ある地域振興に繋がりました。また、近隣8市町村で千曲川ワインバレー特区の認定を受け、世界で



東御市産のワインは、平成20年の洞爺湖サミットのランチに採用、同年の国産ワインコンクールで金賞を受賞しています。

も通用するワインを製造できるまでとなり、今ではぶどう農家を目指した新規就農希望者も増えているそうです。

当町においても、那須町どぶろく・ワイン特区の認定を受けており、醸造用ぶどうの作付けにより、町内産のワインの製造を目指している農業者もおります。今後、農家民泊やレストランを営む農業者等が、自ら生産した米や果実を使用した醸造酒、果実酒の製造ができれば、町内における農業振興に付加価値をつけることに繋がると考えます。これからは農産物を生産するだけでなく、自身で加工、販売まで一体的に取り組める生産者が増えることを望んでいます。

編集後記

編集委員 磯 由起子

新年明けましておめでとうございます。本年もどうぞ宜しくお願い申し上げます。

昨年は、台風19号の大雨により、農作物にも甚大な被害をもたらしました。被災されました皆様には、心よりお見舞い申し上げます。今年こそは、災害もなく穏やかな年でありますように、そして農作物も豊作となることを願うばかりです。

日頃から若い年代の方や子供たちに、食の大切さ、農業の楽しさや喜びを伝えていけたら幸いですと考えています。土に種を蒔き、芽が出て花が咲き、やがて実がなり収穫をする。当たり前のことですが、自分でやってみると感動を覚えます。

私はまだまだ新米の農業委員ですが、「かけた恩は水に流し、受けた恩は石に刻め」の言葉を胸に、これからも精進して参ります。最後になりましたが、この「たがやす」を発行するに当たり、ご協力いただきました皆様に感謝いたします。

編集委員長 薄井 正志
編集委員 林 武信

磯 由起子